

語り継がれる 開墾の歴史

六連町富山地区

昭和10年(1935年)、北設楽郡富山村から渥美郡杉山村(現在の六連町)へ分村移住した11世帯の方々がいました。彼ら



●富山の開拓者と家族(昭和12年ごろ)

は、貧しい日々の暮らしから抜け出すため、希望に満ちて故郷を後にしたので。しかし、移住した土地は小松や笹に覆われた赤土の荒れ地で、彼らを落胆させました。それでも、県の指導員や先に入植した弥栄地区の人々の支えで、約33畝の荒れ地に鋤を入れ手作業で開墾を始めました。果てしない苦労の末、作物を植えられるようになりましたが、次に想像以上の水不足が障害となりました。掘った井戸は水が出ず、遠いため池から水を運ぶ作業は過酷でした。しかし、第1作のスイカをはじめとして次々と野菜の栽培に成功し、豊川用水が通水した今では、市内有数の農業地域となっています。六連小学校では、彼らの苦労を描いた郷土劇『荒れ地に水を』が、毎年学芸会で演じられています。



●『荒れ地に水を』の一場面



「大根のはざかけ」

木で組んだやぐらに大根を引っ掛け、天日干しにします。干した大根は主に漬け物に利用されます。今ではあまり見られなくなりましたが、田原市の農業を支えてきた貴重な原風景です。(大草町)

農業先進地への「鍵」

田原市の農業の発展には、さまざまな背景があります。生産者のため、まぬ努力で「日本一」になったことは間違いありませんが、そのほかの「鍵」を、いくつかご紹介します。

命の水を運ぶ使者「豊川用水」

古来からの、慢性的な水不足に悩まされていた渥美半島を救ったのが豊川用水でした。この用水を提唱したのは、高松村(現在の高松町)出身の政治家、近藤寿市郎氏(広報たはら11月15日号「歴史探訪クラブ」に掲載)。昭和24年から工事が進められ、昭和43年に全面通水されました。現在は、設備の機能回復や効果的な配水のため、豊川用水第二期事業が進められています。

水がめである宇連ダム(新城市)から終点の初立池まで、約98kmの道のりを経て届けられる水。私たちは、水源地域の協力があるからこそ、水の恩恵を受けていることを忘れてはなりません。



●豊川用水(六連町)

「育てやすい」農地へ「農地基盤整備」

昭和37年、旧田原町と旧赤羽根町において、全国初となる農業構造改善事業が開始されました。これは、生産性の向上を図るため農地の区画整理や施設整備などを行ったもので、その後、半島全域に同様の取り組みが広がりました。豊川用水を受け入れるためにも、こうしたほ場整備が必要であり、これらの取り組みが、今日の発展につながったのです。

農業革命「施設園芸」



●電照菊の夜景。赤い光はLED電照(赤羽根文化の森から大山方面)

豊川用水による水の確保が、農業の形態を劇的に変えました。露地栽培だけでなく、収益性の高い大規模なハウス・温室による施設園芸が発展し、トマト、メロンなどの青果のほか、花き類の生産が急激に増加しました。中でも、菊の開花を電照で調整する「電照菊」は、その先進性、収穫量とも、全国的に有名です。